

共同体「キブツ(kibbutz)」の労働行為とダニ・カラヴァンの芸術制作 —— 展覧会「マコム(makom)」(1982年)の分析に基づく再解釈

慶應義塾大学 早坂 若子

イスラエルの現代作家、ダニ・カラヴァン (Dani Karavan, 1930-2021) は、生涯を通して「場」を示すヘブライ語「マコム」を重視した制作を貫いた。その制作の基盤となるのは、シオニズム運動と呼応して、20世紀初頭以降、現在のイスラエル各地につくられた共同体「キブツ(kibbutz)」である。ポーラ・M・イイマンは、この共同体に特異な点として、A. D. ゴードンの思想をあげる。すなわち、ユダヤ人は大地に直接働きかけること、つまり農業を通して、はじめて入植、共同体形成の権利を得ることができるとの主張であり、彼のそのような思想は労働をその基本とする「キブツ」の形成を先導した。1948年、カラヴァン自身も仲間と共に「キブツ・ハイル」を創設し、1955年までそこで生活を営み、そして芸術制作を行った。

本発表の目的は、概してサイト・スペシフィック・アートを代表する芸術家とみなされるカラヴァンの制作の特性を、むしろ「キブツ」における労働行為という観点から捉え返し、新たに解釈し直すことにある。たとえば花粉を用いたインスタレーションで知られるヴォルフガング・ライプらに美的行為としての制作的特性を認めることができるのであれば、カラヴァンの制作はそれらと一線を画すと言わざるを得ない。発表者は、その本質が、倫理的価値の追求と不可分であるとのアスペクトを重視する。

そのための分析対象とするのが、イスラエルのテルアビブ美術館で開催されたカラヴァンの個展「マコム」(1982年)である。作家自身によって展覧会のタイトルにあてられた「マコム」は、「キブツ」を基盤とするカラヴァンの共同体的労働への関心が現れる制作行為と不可分な重要概念にはほかならない。彼はこの展覧会のために、美術館建築内外にわたる板材を用いた大規模な構築物、砂と水を用いた造形作品を制作し、展示室の窓からのぞめる屋外部分にはオリーブの木を植える。この木はアラブ人共同体から新たにイスラエルの入植地となった共同体から移植されたものであり、「キブツ・ハイル」における二つの民族の関係構築への取り組みにも通じる。砂を撒き、植物を植え、板材を加工し組み立てる、というこれら一連の制作行為は、カラヴァンが職人らと共に手を動かす、文字通りの共働によって実現している。

発表者は、カラヴァンのこうした制作の本質は、従来の、いわゆるインスタレーション作品としての解釈によっては十分に明らかにされ得ないとの立場に立ち、発表者自らがイスラエルで行なったキブツ、テルアビブ美術館の実地調査、資料調査に基づいて、以下の結論を導きたい。すなわち、カラヴァンの制作は、美術館に特有の近代性を批判的に組み替えつつ、人々が能動的に生きる場を共に獲得していく「キブツ」的な社会が、現代においても実現しうることを追求するものであった。